



**ＪＡ全農と日清食品の
「2024年問題」の解決に向けた取組
～調達物流×製品物流によるラウンド輸送～**

| Agenda

- 1. エグゼクティブサマリー**
- 2. 背景**
- 3. 目的**
- 4. 具体的な取組と効果**
- 5. 本事業の新規性・創造性**
- 6. 本事業の継続性・課題克服性**
- 7. 本事業の啓発・普及効果**
- 8. 今後の取組**
- 9. 最後に**

Agenda



1. エグゼクティブサマリー
2. 背景
3. 目的
4. 具体的な取組と効果
5. 本事業の新規性・創造性
6. 本事業の継続性・課題克服性
7. 本事業の啓発・普及効果
8. 今後の取組
9. 最後に

■ エグゼクティブサマリー

【概要・目的】

- 概要：調達物流×製品物流によるラウンド輸送(※)の取組
- 目的：日本の「食」と「農」を応援し、新しい価値を創出することで、生産者や消費者など「食」と「農」にかかわるすべての人々のWell-beingを実現する

【新規性・課題克服性・普及効果】

■ 新規性

- ✓ 発着荷主が主体的に連携し、実現した「調達物流×製品物流」という利害関係を超えた垂直連携
- ✓ 物流資材回収×製品輸送の組合せもビルドインし、空車回送を極限まで削減

■ 課題克服性

- ✓ ドライバー拘束時間7%ダウン、積載率9%アップ、CO2排出量17%削減
- ✓ 両者の経営層のコミットにより、「取組路線拡大」や「調達での連携」含めたより包括的な連携に繋がっている

■ 普及効果

- ✓ どの荷主も「必ず着荷主であり、発荷主である」、その当たり前のことを啓発し、生産性向上に繋げた取組
- ✓ 日本経済新聞1面、ヤフーニュース掲載など世の中に先進的な取組として取り上げられ、世の中の物流課題への対応の啓発・普及に貢献

(※)トラックに積み込んだ貨物を目的地で降ろした後、別の貨物を積み込んで出発地まで戻ることにより、空車回送区間をなくし、トラックの配送効率を高める輸送形態のこと。

| Agenda

1. エグゼクティブサマリー
- 2. 背景**
3. 目的
4. 具体的な取組と効果
5. 本事業の新規性・創造性
6. 本事業の継続性・課題克服性
7. 本事業の啓発・普及効果
8. 今後の取組
9. 最後に

背景

両者の①危機意識②従前よりの関係性③将来に向けての想いが結実し、「“物流”と“調達・供給”に関する包括的な連携」へ

①危機意識

社会的課題でもある**物流クライシス**により、
今後モノが安定的に運べない

②従前よりの関係性

カップライス他即席食品の
**原材料、国産原料米を
中心として取引**

③将来に向けての想い

**国産農畜産物の取引の安定化、
柔軟性がある持続可能な
生産・販売・調達への志向**

"物流"と"調達・供給"に関する包括的な連携を開始

| Agenda



1. エグゼクティブサマリー
2. 背景
- 3. 目的**
4. 具体的な取組と効果
5. 本事業の新規性・創造性
6. 本事業の継続性・課題克服性
7. 本事業の啓発・普及効果
8. 今後の取組
9. 最後に

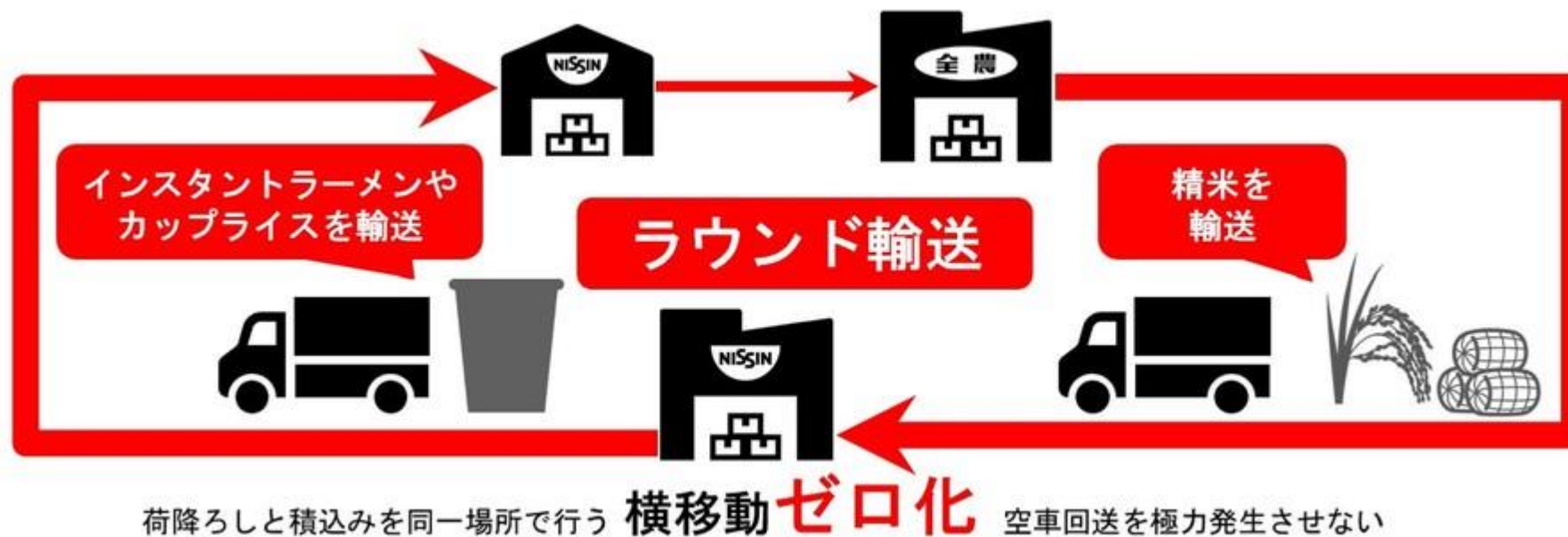
**日本の「食」と「農」を応援し、新しい価値を創出することで、
生産者や消費者など「食」と「農」にかかわるすべての人々
のWell-beingを実現する**

Agenda



1. エグゼクティブサマリー
2. 背景
3. 目的
- 4. 具体的な取組と効果**
5. 本事業の新規性・創造性
6. 本事業の継続性・課題克服性
7. 本事業の啓発・普及効果
8. 今後の取組
9. 最後に

具体的な取組と効果～取組のイメージ～



荷降ろしと積み込みを同一場所で行い、
『ドライバーの移動無し』で調達物流と製品物流をマッチング

効果1

ドライバーの拘束時間：
7%削減

効果2

トラック積載率：
9%向上

効果3

CO2排出量：
17%削減

具体的な取組と効果～課題とその克服～

「ルート選定」「実運用フロー決定」など細かな課題に対しても、「立場を超えた情報共有」「経営層と現場担当者の連携」により克服

課題

ルート
選定

実運用の
フロー決定

運送事業者
の選定

輸送頻度の
調整

「売り手・買い手」「発荷主・着荷主」
といった立場を超えた
情報共有

両者の経営層(役員クラス)と
現場担当者の
緊密な連携

具体的な取組と効果～実現までのステップ～

2022年8月の顔合わせから、実現可能性の高い共同物流や現場でのトライアルを繰り返し、今回の取組実現に至る

2022年8月：顔合わせ

日清食品からJ A全農に物流アライアンスの可能性について打診を行い、初の意見交換を実施
以降様々な切り口から取り組みの検討を実施

2023年7月：東北⇔関東 ラウンド輸送運航開始

岩手にあるJ AおよびJ A全農の米穀保管倉庫から関東にある精米工場へ米穀をトラックで輸送した後、
同じトラックで茨城にある日清食品工場から岩手にある製品倉庫へインスタントラーメンを輸送

2023年8月：調達物流×製品物流によるラウンド輸送トライアル実施

運行時間・輸送品質・物流資材混載、それぞれ現場にて問題ないことを確認

2023年11月
調達物流×製品物流によるラウンド輸送運航開始

具体的な取組と効果～現場写真～



往路(お米)
積み込み状況



往路復路
切替え



復路(即席麺+物流資材)
積み込み状況

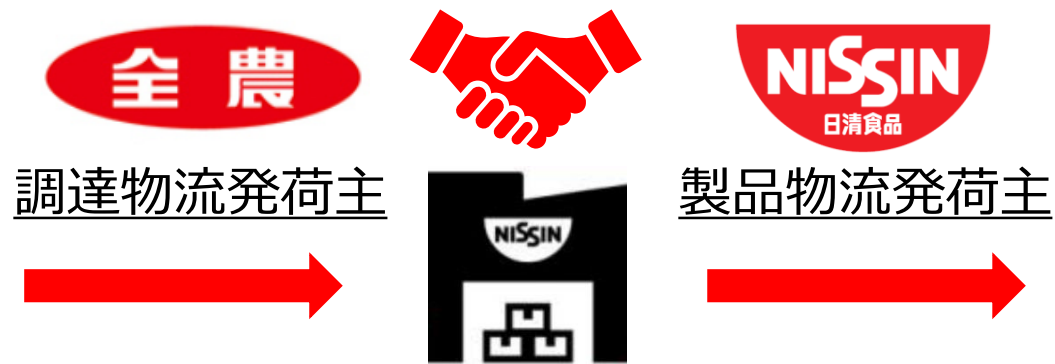
| Agenda



1. エグゼクティブサマリー
2. 背景
3. 目的
4. 具体的な取組と効果
- 5. 本事業の新規性・創造性**
6. 本事業の継続性・課題克服性
7. 本事業の啓発・普及効果
8. 今後の取組
9. 最後に

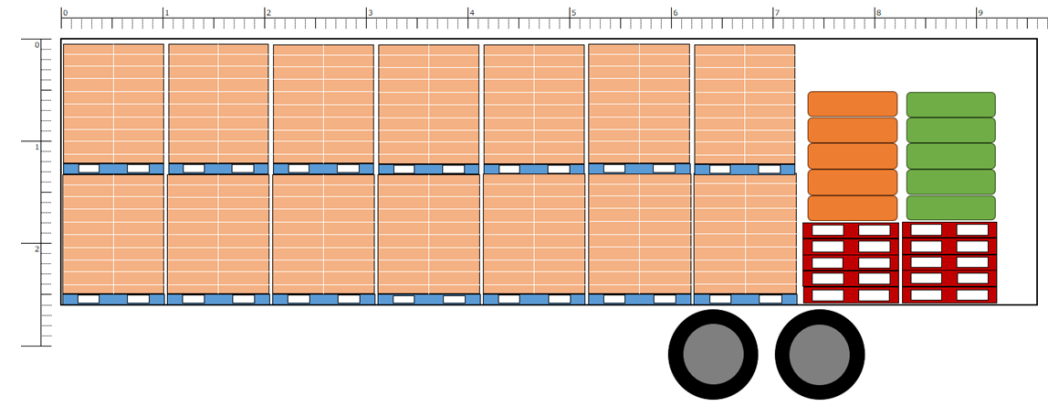
本事業の新規性・創造性

利害関係を超えた垂直連携



- 片道が空車同士のマッチングは普通に考えれば、当たり前のこと
- ただ「製品物流」と「調達物流」は荷主や所管部署も違う、また購買という商流取引関係がある場合の垂直統合の困難性克服など、荷主主導での実現は新規性の高い事例

空車回送を極限まで削減



- 製品と物流資材(パレット・フレキシブルコンテナ)の混載物流もビルドイン
- 積載率向上にも貢献

| Agenda



1. エグゼクティブサマリー
2. 背景
3. 目的
4. 具体的な取組と効果
5. 本事業の新規性・創造性
- 6. 本事業の継続性・課題克服性**
7. 本事業の啓発・普及効果
8. 今後の取組
9. 最後に

本事業の継続性・課題克服性

定量的な効果

- 横移動ゼロ化→**ドライバー拘束時間 7%ダウン**



荷降ろしと積み込みを
同一場所で実施

- 製品×物流資材→**積載率 9%アップ**



復路便では
物流資材も輸送

- トラック台数削減→**CO2排出量 17%ダウン**



共同輸送化により
トラック台数削減

より包括的な取組へ

- 国産農畜産物の安定的な調達・供給



国産米
100%

- 付加価値の高い「国産」の
農畜産物の活用を拡大

- 鉄道や海上を活用した共同輸送への拡大



- 関西～東北間での
鉄道コンテナ輸送
- 東北～中部での
ラウンド輸送と、
関東～九州でトレーラー
を用いた混載輸送 ¹⁶

| Agenda



1. エグゼクティブサマリー
2. 背景
3. 目的
4. 具体的な取組と効果
5. 本事業の新規性・創造性
6. 本事業の継続性・課題克服性
- 7. 本事業の啓発・普及効果**
8. 今後の取組
9. 最後に

本事業の啓発・普及効果

世の中へのインパクト

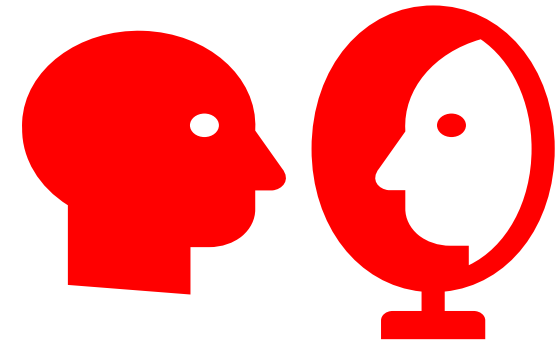
記者会見の様子



- ニュースリリース発出のタイミングや記者会見の実施など「タイムリーな情報発信」により多くの媒体にて情報が拡散
- 物流2024年問題への注目拡大とも重なり、流通関連の専門誌だけでなく、一般的な媒体でも多く取り上げられ、共同物流の啓発に大いに貢献

他荷主への展開

発荷主 であり 着荷主



- いかなる荷主も「発荷主」であり「着荷主」であり、多くの事業者で実施可能である取組として啓発
- 本取組の普及により、「実車率」「積載率」の改善に繋がっていくことができる



以上